会　議　記　録

高松市附属機関等の会議の公開及び委員の公募に関する指針の規定により、次のとおり会議記録を公表します。

会議名	令和元年度第２回高松市創造都市推進審議会
開催日時	令和２年２月１２日(水)　１３：３０～１５：３０
開催場所	市民交流プラザＩＫＯＤＥ瓦町 アートステーション　多目的スタジオ
議題	（１）第２次高松市創造都市推進ビジョンにおける取組について
公開の区分	■　公開　　□　一部公開　　□　非公開
上記理由	
出席委員	佐々木会長、真鍋副会長、出木浦委員、西成委員、大久保委員、木村委員、三井委員、小池委員、香西委員、橋本委員、グルネウォルド委員、篠田委員、渡邉委員、柳萬委員
事務局	長井創造都市推進局長、西岡産業振興課長、佐野産業振興課長補佐、十河農林水産課長、金崎市場長、渦岡観光交流課長補佐、吉峰観光エリア振興室長、川野文化芸術振興課長補佐、次田文化財課長、丸山スポーツ振興課長補佐、小川口政策課企画担当課長補佐、松本産業振興課主幹、三浦産業振興課創造産業係長、松下産業振興課主任主事
傍聴者	２　人　　（定員　１０　人）
担当課及び連絡先	産業振興課　創造産業係 ８３９－２４１１

審議経過及び審議結果

１　開会及び委員の紹介等

【会長】
２か月ほど前に、中国で新型ウィルスが発見されてから大きな騒ぎになっており、ここ数年のインバウンドの騒ぎがうそのように平静な状態になっているが、将来をじっくり考えるのにはちょうどいい機会だと考えている。
議題に入る前に、この度、副会長であった委員が本審議会委員を退いたので、条例に則し新たな副会長を私から指名したいと思う。

佐々木会長が真鍋委員を副会長に指名。

【副会長】
前副会長の後をしっかりと引き継がせていただきたい。どうぞよろしくお願い申しあげる。

審議経過及び審議結果
２　議題（１）第２次高松市創造都市推進ビジョンにおける取組について （事務局から配布資料について説明） 【会長】 只今、説明いただいた取組について御意見や御質問のある方がいれば御発言いただきたい。 【委員】 資料の確認だが、工芸プロジェクトの６番「むれ源平石あかりロード」と７番「AJI　PROJECT」については、「継続」ということでよろしいか。 【事務局】 資料２に記載のとおり、今後の方向性については「継続」の方向である。 【委員】 「AJI　PROJECT」は、現在、独り立ちを目指しているところなのでよろしくお願いしたい。 【委員】 先ほどの委員と同様の質問だが、交流プロジェクトの「温泉をいかした塩江地域の観光振興事業」も「継続」ということでよろしいか。昨年の配布資料では、「拡充」だった事業だが。 【事務局】 こちらの事業も資料２に記載のとおり、今後の方向性については「継続」の予定である。拡充した事業を継続するとお考えいただきたい。 【委員】 資料３のブッキングドットコムのことでお伺いしたいが、「２０２０年の旅行トレンドにおいて、注目すべき新興目的地のＴＯＰ１０に、日本で唯一、「高松」が選ばれました」とのことだが、このサイトで、これまで日本でどういう都市が選ばれたのか、あるいは、これまでは日本でいくつぐらいの都市が選ばれていたのかについて、もし御存知であれば教えていただきたい。 【事務局】 只今の御質問については、当サイトの過去の経緯について、調査ができていないので、後日、回答させていただきたい。

【会長】
　私が知る限りは、前年は京都だったように思う。この２０２０年というのは、前年の瀬戸内国際芸術祭時のデータが大きく反映されている。
　市制施行１３０周年ということだが、四国内で、同じように他の県庁所在地も迎えることになるのか。

【事務局】
　今のところ、四国内では聞いておりません。

【委員】
　資料についての確認だが、先日配布された資料と同様の資料が、本日配布されている。これは、資料を差し替えるということでよろしいか。

【事務局】
　本日の資料に差し替えていただくものである。

【委員】
　交流プロジェクトの１０番「屋島山上拠点施設整備事業」についての実態と何を目指しているのかを御説明いただきたい。

【事務局】
　当事業の状況について、御承知の方もいらっしゃると思うが、工事着手の段階に至っている。今年度、実施している工事の入札が３回不調になり、現在、４回目の入札を行っているところである。先日の２月の６日に開札が行われ、その結果を基に審査が継続されている状況である。近いうちに、審査の結果が出て落札業者が決定できたら、その時点で工事の仮契約となる。来月の３月議会で議決をいただければ、本契約となり、そこから工事に着手する予定である。今のところ、令和３年の秋ごろに建物が完成する見込みであるが、工事事業者との協議であるとか、実際の現場の状況により前後することはあるかと思う。

【委員】
　現状についてはよく理解できたが、お聞きしたかったのは、この事業は何を目指して、これができるとどういう効果が出るのかについてお教え願いたい。

【事務局】
　屋島については、高松を代表する観光地であることは御承知のとおりだと思うが、屋島の歴史的・文化的・自然的な多面的な魅力をどこで知ることができるのか、体感することができるのかといったことを考えたときに、現地ではそういったことを学んだり楽しんだりすることができる施設がこれまではなかった。そういった観光客を実際に、現地でそういった魅力を総合的に体系的に学んだり楽しんだりすることができる。あるいは観光客や市民同士がその施設を活用して様々な交流ができたり

色々な表現ができたりといったことができる多様な目的で整備している施設である。具体的には、施設の中に休憩スペースであるとか、屋島からの山上をより一層楽しめることができる展望施設であるとか、会議スペース・展示スペースを備えた施設を作るものである。建物そのものは国際プロポーザルで設計者を選定して、設計を進めてきた施設であり、設計者の独創性が発揮された非常に特徴的なアートとしての魅力を持った施設にもなっている。そういったいろいろな機能を持ち合わせつつ、建物自体がアートとしての機能を持っているということで、建物自体もアートとしての魅力を表現したり、来訪意欲をくすぐるようなデザインの施設になっている。私どもとしても、そういった多目的な機能を最大限に生かしながら、より多くの方に屋島に来ていただく、屋島に来た方々に屋島の魅力を存分に知っていただく、楽しんでいただく、満足して帰っていただき、また来ようと思っていただくというような取組を、施設を通してやっていければと思っている。

【委員】
　御説明感謝する。山上でのイベントも含めて、交通の便など誘致の方法は、市として持っているということでよろしいか。

【事務局】
　その辺りは、まだ一部、検討途中のものもあり、これから施設が整備される見通しが付けば、運営面についても、当然に並行して検討していくことになる。今のところ、指定管理による運用を検討しているところである。これから指定管理者の候補となる方々に、サウンディングをしてどのような施設の活用方策があるのか、民間であればどういった施設のルールであればより施設を活用して集客力を高めることができるのかといったこともヒアリングしながら施設の管理ルールを決めていく、あるいは活用の方法について、官民が連携して考えていくということをやっていきたいと考えている。交通の面に関しては物理的な問題もあり、中長期的に解決しなければならない課題もある。特に山上までのアクセスが片側一車線に限られているという物理的な制約もある中で、どのようにすれば混雑が回避できるのか、あるいは他のアクセス手段としてどうあるべきなのかを総合的に考えていこうとしている。いずれにしても、そういった問題についても引き続き解決に向けて取り組んでいく。

【委員】
　ハード面についてもソフト面についてもお聞きできたので感謝する。個人的には、自転車が趣味なので、あそこの坂を利用したヒルクライムなどの大会をやっていただけると面白いかと思う。

【会長】
　屋島の活性化について御意見が出たが、今、国の方で「文化観光拠点施設を中核とした地域における文化観光の推進に関する法律」が準備されている。この動きについては、当然に察知されているかと思う。

【事務局】
　文化観光の動きと併せて、環境省においても、国立公園をより外国人の方に楽しんでいただけるような動きの双方について把握している。他方で、色々な国の支援メニューなり制度改正なりが情報として入ってきているが、なかなか現場としては、それを即、活用できるかとなると、なかなか難しい面がある。そういった国全体として、文化なり国立公園というものを観光面でも重視して、特にインバウンド向けに発信していこうという大きな流れは、我々としても追い風として認識しているところである。今後、よりそういった国全体の詳しい動きや個別の支援制度なりの情報にアンテナを張って活用できるものは活用していく。あるいは、流れを見ながら、施策としてどうあるべきなのかについて検討していきたい。

【委員】
　拠点は、色々と交流のために整備されていると思うが、外国の方や県外の方が何日間で見たい又は行きたいと思っても、今の高松だけ見ても車がないと不便だったり、バスの便が少なかったり、電車が通っていないところがあったりする。特に海外の人は、そういったことについてもっと分かりづらく、小豆島だけ見ても、小豆島に行ったけれども、車がないと不便なため、全部を回れなかったという不満もよく聞く。世界から来た人や国内の県外から来た人からしたら、高松市の拠点だけでなく、三豊だったり、仏生山だけでも遠いのに、観音寺だったり志度だったり塩江だったり、色々な素晴らしい拠点をピックアップして観光したいと思うが、そういった交通手段をもう少しスムーズに分かりやすくできるような策が必要なのではないかと思う。

【事務局】
　御指摘のとおり、高松市、あるいは香川県は、いわゆる二次交通が弱いことについて、県や市町も十分に認識しているところである。ただ、色々なハード的な問題もある中で、どういった形がいいのかについて、香川県が「香川せとうちアート観光圏」として国の指定を受けている中で、高松、琴平、小豆島、直島の各観光拠点をどう周遊してもらうのか、どういうふうに結んでいくのかについて懸案事項として挙げた中で、県内市町や高松市も入って検討している。やはり観光地としては、高松市も拠点であり、宿泊施設も高松にほとんど集積しているということもあるので、今後、インバウンド等、外国人観光客が、特に、不便に感じているものをどうしていくのかについて、大手海外サイトに注目されていることも踏まえながら、県と連携して一緒に取り組んでいく。ＪＲなど、民間企業の今ある取組をどう活用していくのかという点も含めて、検討しているところである。

【委員】
　インバウンド関係では、今、弊社が色々と外国人をお招きして、色々

な問題点をいただいている中で、実際の利便性の向上のため、交通自体を整備していただくということは、少し時間がかかりながらも促していただきたい項目ではあるのだが、一番、外国人が困っている項目であるのが、アクセスするための情報源が一つにまとまっているサイト自体がないことである。情報発信ということであれば、お金をかけずに、もしかしたら、単年で改善できるところもあるのではないか。インバウンドというところで気が付いたところをお伝えすると、盆栽であったり塩江であったり、色んなアートであったりと、高松は非常に注目されている場所であると思うが、そこで、先ほどの交通やアクセスというところと、何より彼らが一番困っているところが、情報が少ないというところである。一過性の一つの情報というよりも、常にアップデートされているような情報、特にイベント関係かつ高松のブランドになっていくような情報を発信していただけるところが必要であり、盆栽などは非常にポテンシャルが高いと思うので、特にオープニングフェスタなどを予定されているのであれば、情報発信をそういうところにも投げかけていただければと思う。

【事務局】
　御指摘のとおり、交通については、ハードの問題があるので中長期的な視野の中で、県と連携して考えていきたい。また、おっしゃるとおり、情報源、特にインバウンドの方への情報発信については、基本的には、香川県が「うどん県旅ネット」という多言語化しているサイトを持っており、そこに県内の各市町あと県の施設を含めた観光情報について一定程度、掲載されており、モデル的な周遊コースも掲載されている。加えて、高松市では、「エクスペリエンス高松」という多言語化した情報発信サイトを所有し、例えばイベントなどの情報を掲載しており、また、日本の中で世界に向けて発信している「ＭＡＴＣＨＡ」というサイトとも連携している。しかしながら、委員の御指摘のとおり、それでもまだ情報が不足しており、また、分かりにくいという声も耳にしているので、その辺りのネットでの情報発信については、外国人観光客の方、インバウンドの方の目線に立って、もう少し整理する必要があるのではないかと思っている。そういったことも、先ほど申しあげた「香川せとうちアート観光圏」の中で、議題として進めていきたいと考えている。あと、高松空港と高松駅には多言語対応したインフォメーションセンターも香川県と高松市で連携して設置しており、利用度は高い場所なので、情報をアップデートしながら的確な情報がインバウンドの方に伝わるようなことについて、いただいた意見も含めて、利用者目線での更なる向上を目指していきたいと思う。

【委員】
　個別の事業というよりは、創造都市全般の話になるが、交流プロジェクト４番「魅力にあふれ、人が輝く創造都市推進事業」について、今年度はどういった取組をされて、次年度はどういったことを予定されているのか。

【事務局】
資料２にも記載のとおり、本審議会の開催や下部組織である４０歳未満の方で構成された高松市創造都市推進懇談会（Ｕ４０）の開催を通じて、本市の活性化に資する御意見をいただきながら、全国の自治体が参画する創造都市ネットワーク日本の事業に参加し、積極的な情報交換をするということが主な内容である。参考までに、実施実績では、「高松市創造都市推進局フェイスブックページ」いいね！の数を一つの指標として設定させていただいている。

【委員】
この事業に、Ｕ４０の事業費が入っていると考えてよろしいか。

【事務局】
昨年度の決算額の中には、昨年度、Ｕ４０に取り組んでいただいた経費が含まれている。

【委員】
私自身がＵ４０の時に、何人かのグループを組んで人材育成に関する提案するチームで活動していた。その後、なかなか、その提案は実現していないが、職員研修をもっともっと充実させてはどうかと考えており、予算はそんなにかからず労力ばかりかかる話だと思うが、中長期から見ると市役所職員の方の創造性を引き出すとか人材育成というのが、創造都市の政策の中で最も重要ではないかと思うぐらい重要視している。以前、Ｕ４０の時にお聞きしたのは、職員研修については創造都市推進局ではないので、なかなかタッチしづらいのではないかもしれないが、現在の職員研修の方にもう少し創造都市的なクリエイティブな発想で、職員研修を拡充できないかと思っている。具体的な内容については、もしよければ僕自身も入らせてもらって、どんなふうにやっていけば良いかということを、是非、一緒に打合せさせていただければと思っている。職員研修の現状と今後の職員研修を拡充することについて御意見をいただければありがたい。

【事務局】
色々と参考となる御提案をいただきありがたい。職員研修については、総務局人事課が所管しているところであるが、今回の御提案など本日中に御回答できないものに関しては、後日、お調べしたのちに回答させていただければと思う。まずは、そういった御意見があったことを担当課にはお伝えさせていただきたい。

【委員】
職員研修については、ここにいる委員の方も「自分の企業でこんなことをやっている」や「こういった研修をすればよいのではないか」といったことを提供していただければと勝手ながら申しあげたい。なんとか

進めていければという思いであるので、もしあればおっしゃっていただきたい。

【事務局】
　市の職員がもっと創造都市について知った方が良いという趣旨でよろしいか。

【委員】
　そうではない。創造都市について知った方が良いという趣旨ではなく、創造的に動ける人材を増やすという趣旨である。

【事務局】
　補足説明にはなるが、現状、Ｕ４０委員から出していただいたテーマや事業を検討する際に、早い段階から創造都市推進局を越えて若い職員にも意見交換の場に入ってもらい、お互いの意見を出し合っているのがまずある。また、新規採用職員に向けて、全庁的に創造都市について知ってもらうための研修を実施しており、その上で、創造都市推進局に異動になった職員に向けて、毎年、研修を実施している。人材育成という点でいうと、実務的にＵ４０委員と実際に関わって話し合いをしているという状況である。

【委員】
　先ほどの委員の話を受けて、数年前にこの審議会が最初に立ち上がったときに、委員も「会長の執筆された本も含めて、勉強してから参加しよう」という話が出ていたと思う。市の方々も、産業振興課の皆さんが中心ではあるが、一部の方がとても熱く語っており、全体に波及していなかったなという印象を強く思っている。第 2 期になってその印象が薄まって、淡々と評価をしたり、御意見を述べるという会議になって、これが本当に創造都市の会議なのかという反省をしていた。もっとカオスな状態になるというか、色々な予算をつけていただいている政策事項なので高松市の庁内を含めて、「創造都市とは一体こういうことではないか」というぼんやりとした仮説を皆さんが考える、政策を考えるというか、タッチされている職員の方々が「創造都市的な動きをするのであれば、この政策はこんな落とし方をしたいよね」というような議論ができるような、していただけるような動きが、本当の創造都市の動きなのではないかと思っているところに、先ほどのお話をいただいた。Ｕ４０をやっているからというところだけで、「一生懸命やっているから皆さん認めてね」という空気感がとっても強いので、それはとても残念だなと私は思っている。
　もう一度繰り返すと、創造都市を推進していく母体となる局なり、部署となるとＵ４０の人たちも含めてということになるのだろうが、もっと参謀室的な動きで、どうやって人を巻き込んで、どういう組織を巻き込んでいきながら、どういう手を打っていき、この４０数万人の地域の中で、「創造都市高松を一緒に作っていきましょう」というムーブメン

トをどのように作っていくのかというようなシナリオができるようにしてほしいと改めて思う。

【委員】
　私も、やはりこういう形になっていくと、おそらく、一つ一つの事業を確実にやっていくことの方が非常に大切になっていき、もともとあった情熱のようなものが拡散していくような感じはあるのだが、それをどういうふうに測ったらいいのかと思っていた。その一つが、おそらく、この資料の中で「継続」とされているものとか「拡充」となっているものではないかと考えていた。これが、どういう判断でどういう方向でこういう結論になっていったのか、おそらく、それぞれに評価されてこういう結果になったのだろうと思うのだが、ちょっと、この資料だけではよく分からない部分がたくさんある。「完了」や「廃止」というのは分かるが、非常に大まかにいって、「継続」した内容がとりあえずやらないといけないからやっているのか、あるいは、どうしても次の目標がこれだからこういう形で継続しようという形での提案なのかどうか、そこの辺りが、この資料だけでは分かりにくい。限られた時間の中で一つ一つお伺いすることは難しいと思うので、少なくとも基準になった部分について、どういう議論をされてここに出されているのか、教えていただけたらと思う。

【事務局】
　「継続」や「拡充」といった方向性の内容については、基本、市の事業ということであるので、予算化をするなり、予算を執行したら決算を表示するというところであり、当然、継続や拡充するというところであれば、事前の予算額が計上されていくというところである。そういった中で、漫然とやっているから続けていくという事業は、おおむねないというところで認識している。市にとっても、当然に実施すべき事業であるから予算化されており、新規又は拡充する場合は、それぞれの事業を膨らましていくなり、明確な目的なりがあって計上していくというものである。そういったことからも、予算が必要な場合は、当然、議決もいただいて認められていくというものなので、それぞれの内容については、やはり、それぞれの事業について説明していかなければならないことになるが、資料に記載している「新規」や「拡充」というものは、そういった意味であり、唯々、事業を行っているというものではなく、検証も行い、実施していくべき事業という判断も踏まえて、検証が行われている事業であると認識している。

【委員】
　おそらく、そうであろうとは思っているが、一つ参考にしていいのかと思った指標として、「昨年度からの上昇率」というものが資料に記載されている。だいたい８０％ぐらいあれば、「継続」にしているのではないかと感じている。その中で、食プロジェクト５番「さぬきマルシェ in サンポート」は上昇率としては低い状態にある。これは、もう一回、

心機一転何か新しい政策でやっていくのか、もし、分かっていれば教えていただきたい。

【委員】
当該事業は、香川県の事業で、２０１１年から香川県が、１２回、実験的に開始して、翌年から実行委員会が立ち上がり、我々の法人が事務局としてお手伝いをし始めて９年になる。数字の上で少ないのは、開催回数の数字であり、一昨年から毎月１回に減らしている。なぜ減らしたのかというと、毎週、行っていた時には、少ない時で５店舗の少ない中で頑張っていた時期があったが、現在は、約４０から５０店舗が出てくるようになり、開催回数でいうと、年々、減少しているが、出店社数と来場者数というのは、逆に増えているという感想を持っている。
この事業の話が出たので、併せて発言させていただくと、この費用は県の費用である。高松市がどれだけお金を負担している把握していないが、高松市の食プロジェクトとしてこの事業を出していただいている限りは、是非、高松の関係している生産者の方に出店していただけるよう、高松市からお声をかけていただきたい。我が事業にしていただけたらありがたい。

【事務局】
当該事業については、御指摘のとおり、県の事業であり、県からも「連携して、もう少し充実していかないか」という話もいただいているところなので、その辺りも含めて、市としてどういった形で関わっていくのかについて、創造都市ビジョン上のことと、市の創生総合戦略上のこと、また、総合計画に基づくまちづくり戦略計画における位置づけも含めて検討させていただきたい。

【委員】
また、屋島の話に戻って恐縮だが、交流プロジェクトの１０番と１１番の屋島関係の事業については、昨年度からの上昇率は、何が上昇しているのか御説明いただきたい。資料を見ると上昇しているのかと思うが、地元住民からするとあまり活性化されているように思わない。

【事務局】
まず、「昨年度からの上昇率」の数字については、１００％を超えていなければ、前年よりは上回っていないという見方になる。例えば、１１番の「９９．３％」ということであれば、前年より「０．７％」落ちているということになる。実施実績の「屋島山上入込客数」でいうと、平成２９年度が「４９８，６９６人」に対して、平成３０年度が「４９４，９８４人」と、若干、減少しているという状況で、どんどん人が増えているという状況ではない。
そもそも、屋島活性化の取組については、平成２５年１月に色々な関係者から成る会を作る中で、色々な議論がある中で、屋島は高松市を代表する観光地であり、世界に誇れる地域資源であることを官民で認識を

一致させ、その資源の活用であったり、にぎわいづくりであったり、市民の学習の場であったり、いろいろな方面で活用して、誘客なりにぎわいなり、色々なことをやっていこうということを平成２５年に決めた。その時に「屋島活性化基本構想」が立ち上がったわけだが、そこには４４のいろいろな事業が記載されている。当然、観光だけではなく、子どもの学習の場であっても屋島は活用されるべきであり、色々な面での活用方策が示されたわけである。我々としては、それを基に「屋島活性化推進事業」に取り組んでいるところである。ここ近年では、ハード面を中心に動いている状況である。御承知かとは思うが、旧屋島ドライブウェイと言われていた民間の有料道路を市道とし、誰もが気軽に山上に登れる環境づくりを整えたり、それと併せて山上の駐車場も整備し、景観整備などを進めている。ソフト面についても、情報発信だとか、各種団体が屋島を中心に展開しているイベントや事業に対する補助等を行っている。そういった中で、ここ数年のうちで、一番、集客なり屋島の活性化に大きな役割を果たすであろう「屋島山上拠点施設」が完成していない状況になり、本格的にそういった成果が出てくるのは少し先のことにはなろうかと思うが、少し入込客数が横ばいになってはいるが、他方で「屋島活性化基本構想」ができた平成２５年度から、やや中期的にこの数字を見ると、当時、４６万人弱であった数値が施策的には十分な展開ができていなかった中であっても、３０年度は約４万人増の状況にある。これについては色々な評価の仕方、見方はあろうかと思うが、我々としては、こういった取組、特にこれまでなかなか手が付けられなかった課題、特に大きな課題があるわけで、じっくりと取り組んで中長期的に物事を見据えていく必要があるだろうと思っており、そういう面では、じわじわではあるが、衰退はしていない、少しずつではあるが、人の流れができつつあるというふうに思っている。その辺りを冷静に分析しながら、今後の施策展開、事業展開を考えていきたい。

【会長】
　今、色々な形で議論が出たが、要は、屋島についてみると、３年に１回の瀬戸芸の直接の効果は出てこないということになるのか。

【事務局】
　効果が出ていないことはなく、直近の令和元年の数字でいうと、５０万人を超えている。年度と年次で少し数字が変わるが、やはり、瀬戸芸がある年というのは、少し入込が多い傾向にあるのではないかと思っており、特に昨年の瀬戸芸は、四国村も瀬戸芸の会場になっていただき、作品展開がなされていたことから、特に、四国村では例年以上にかなりの入込数があったところであり、当然、屋島もその波及効果が出ていると思っている。少し会場が離れている関係があり、それほど、島しょ部のような直接的な効果は出ていないにしても、その瀬戸芸の効果も一部も受けながら、屋島の今の動きがあるのではないかと認識しているところである。

【会長】
わりと全体的に説明されるので、多少ダイナミックに、こういう要因があるからこうなったと説明していくと地域の変化が分かるような気がする。人材育成の話に戻るが、担当の職員だけでなく、全庁的な職員の中に創造的なマインドが広がっているのかどうかという根底的な投げかけがあって、できるだけお手伝いしたいという提案があったので、今すぐ回答していただく必要はないが積極的に問題提起を受けていただきたいと思う。先ほどの資料を見ると、「魅力にあふれ、人が輝く創造都市推進事業」の経費が、結構、減少している。

【事務局】
この変動については、先ほども御紹介したＵ４０の委員の方が取り組んでいただいた補助金分の経費が、今年度予算の中には入っていないわけである。これは必ずしもこういったことをしなければいけないといった事業ありきではなく、Ｕ４０の方々が議論をしていく中で、新しくこういった事業をしないかという提案の中で予算化をしていくものであるので、必ずしも右肩上がりになる又は下がっていくものではない。要は、創造都市推進の事業自体の経費が減少しているわけではない。

【会長】
そうであってほしいところであった。ということは、資料３の最後のページにＵ４０の「アイデア提案実施状況」が半分程度は検討中になっているので、これが年度末に向けて実施されるようになると予算が振られるようになるのか、それとも、たまたま、Ｕ４０の方の提案が、今年度はあまり具体化されなかったということか。

【事務局】
Ｕ４０の事業は、基本的には検討期間が１年、実施期間が１年ということで、予算の変動があり、決算額だけでみるとどうしてもデコボコのような形になる。資料３については、既に今年度から開始したものもあるが、基本的には、来年度の実施を想定しているものがほとんどである。パラリンピック関係で考えていただいた事業は、新年度予算で計上していこうと考えているが、他の事業については、各課で予算措置がなされている既存の事業を見直すような形で対応していく想定である。

【会長】
少し安心した。この懇談会は、元々、４０歳未満の若い人たちの積極的な提案を受け止めて事業を展開する会議であり、その活力が創造都市事業の活力につながっていたので、その活動が一つのバロメータになる。かつては、懇談会の代表者がこの審議会に来て意見交換をしたということもあったので、いずれまたそういう機会があってもいいと思う。

【委員】
そのＵ４０の方に、屋島のことについての意見を聴きたいと思ってい

る。予算が多いというのと、入札が不調に終わっているというので、計画が始まったのが平成２５年ということで５年経っているので、今考えるとどうなのだろうとか、次の世代として税金がかかって継続するとなるとどういうふうに思っているのだろうというのを聞いてみたいと思った。

【委員】
　私自身も「ちょうちんカフェ」に関わらせていただいており、国立公園という自然資源と文化資源である讃岐提灯を生かしている取組だが、屋島にも関わりが深く、今、特徴的な動きがあるのが、屋島山上の方々は、５年ほど前に我々大学が市と連携させていただいて屋島に関わらせていただいたが、山上にある５店舗ぐらいの飲食店やお土産屋さんは、本音としては「正直なにをするのか。迷惑です。」といった感触だったが、いろいろと学生たちと入っていく中で、４年経った今、山上の方々が自分たちで「屋島マルシェ」ということをやるようになった。ある建物の中に、高松のいろいろなパン屋だったり占い師だったり、いろいろな元気のある方をお呼びしており、この間の１２月にやったら駐車場が入れないぐらいいっぱいになって、これまでは受け身だった方々が、自分たちでインスタグラムを使って発信を始めている。そんな状況が出ており、正直、予算額とは関係ない部分であり、人の想いで人は変わっていくのだなと思ったが、これから拠点施設が整備されるということは、屋島山上の方々にとっては、すごく追い風にはなっている。我々が「ちょうちんカフェ」をやらせていただいた飲食店は、今、何千万というお金をかけて大改修に踏み込んだというような状況である。そういったことも、市として屋島をとても推しているところの予算ではないかと思う。そんなに批判的には、私は捉えていない。

【委員】
　屋島も含めて、海外旅行サイトブッキングドットコムに高松が選出された。そのニュースに対して、高松の方は喜ばれていると思うが、この選出されたことをさらにＰＲするような動きはあるのか。屋島のＰＲもしていただきたいという前提の話になるが、例えば、外国の方が一番来られているのは東京だと思うが、次が関西、その次が和歌山となり、なぜ和歌山が来るかというと、和歌山県の広報か何かの人が、海外の旅行雑誌にずっと和歌山のことをＰＲし続けて、それが１０年目ぐらいになったときに、だんだん増えてきたという事例がある。海外の人が何を見て旅行先を決めるかというと、アジア圏内では旅行雑誌が１位である。以前、和歌山の方に話を聞いたら、角川が出している旅行雑誌があり、台北ウォーカーとか香港ウォーカーなど今は増えていると思うが、その雑誌は台北や香港の情報ではなくて、日本の観光地が載っている。そこに例えば、「ブッキングドットコムやスカイスキャナーで、日本で唯一高松が選ばれたので高松の特集をお願いします」などのリリースや手紙を出して、少し補助もしながら、屋島ももちろんそこでＰＲしてもらう。もし、既に動かれていたなら恐縮だが、そういった動きをされては

どうかと考えていたことと、例えば、フェイスブックは、日本人では２０数パーセントしかやっていないが、世界のＳＮＳ１位はフェイスブックで、去年の調べでは２３億７，５００万人が、特にアジア圏は７割の方がフェイスブックをしているので、「Takamatsucity2020」といった感じの２０２０年に限定して、高松市内のおすすめのＰＲを英語でするアカウントを作られたらすごく良いのではないかと思った。あとは、ジャパンタイムズという新聞があり、私もニュースリリースを出し載せていただいたことがあるが、日本で唯一の日本のことが載っている英字新聞である。海外でも読めるし日本でも読めるが、海外で発信力のあるビジネスマンがよく読んでいるので、そこにも情報を投げたり、海外にせっかく選ばれたことを発信するという動きがあったら、もっと広がっていくのではないかと思った。

【事務局】
　今、色々な御意見をいただいたが、まず、ブッキングドットコムについては、先ほど御説明した資料３の８ページでもこれを機に「観光客受入環境整備事業」を行い、それと同時に、当然、情報発信についても世界に発信していく。その方向としては、市の「エクスペリエンス高松」というサイトであったり、ＳＮＳであったり、当然、いろいろなことに経費がかかる分については、新年度予算で要求させていただく中で、議決をいただければ、観光交流課を中心に局の中でどういった手法が一番効果的なのか検討しているところなので、コロナウイルスの動きにも注視しながら、若い職員を募って取り組んでいきたいと考えている。屋島に関しては、構想策定から７年目に入るが、御意見のとおり、山上のお店のリニューアルだったり、四国村の動きだったりと、行政が投資することによって民間の動きにつながっているものもあるので、そういった動きをさらに誘発していきながら、官民協働で取り組んでいきたい。また、Ｕ４０に屋島活性化事業について御意見を伺ってほしいとのことだが、山上拠点施設整備事業については、入札不調ということはあったが、実施する意思決定がされているので、先ほども御説明したように、この先、できた施設や屋島全体をどのように活性化していくのかについて、民間にサウンディングをしていく中の、その一つの手法として、Ｕ４０に屋島をどういうふうに活用していくのかという方向性については、当然に検討していきながら、様々な方々の御意見を取り入れて活性化していきたい。

【委員】
　そもそもの大枠の話をおうかがいしたいが、資料に掲載されているいろいろな政策の一覧は、例えば、市民政策局でやっている「地域おこし協力隊」が、「こんな商品を作りましょう。」や「こんな活動をしました。こんな発表会をしました。」というような話は、この一覧には載ってこないようなジャンルなのか。創造都市を作っていくために、彼らはすごく活動をしていて、現場でいろいろな施策をやっているが、そういったことは創造都市ビジョンの中には組み込まれないのか。

【事務局】
資料２については、現状として創造都市推進ビジョンに関係している事業ということで、４つのプロジェクトごとに掲載させていただいているが、毎年、全庁的に追加事業等がないかを提出してもらい、ビジョンの関係事業として掲載するような整理にしているので、対応は可能である。

【事務局】
補足させていただくと、御指摘のとおり、地域おこし協力隊は、先般、成果発表会もあったが、地域の活性化のために国の事業で来ていただき、本当にいろいろなアイデアを使って、経費もかけずに取り組んでいただいており、当然、そういった活動を、我々の創造都市の推進に生かすべきだと思っている。我々としては、所管している市民政策局と協議をして、創造都市ビジョンにも含め、たかまつ創生総合戦略上の位置付けも含めて活用するべきだと思っているので、そこは整理を進めていくように調整していく。

【委員】
加えてお話させていただくと、交流プロジェクトの６番「創造支援センター運営事業」ができたときは、私たちも２年間、御世話になって、すごく有効だったセンターだったが、あれから６年、７年が過ぎて、今の活用状況がどうなっているのかが心配なのと、このまま放っておくと寂しい感じで毎年行くのではないかという気がしており、もうちょっとここのところを創造都市の核になるような、いわゆるインキュベーションセンターというか、頭脳化センターとして拠点性を持たすとか、サポート体制を強めるとか、センターを拡充させるとかといったことはないのか。

【事務局】
利用状況に関しては、ちょうど入れ替わり時期のため、公募をかけて、全６部屋の中、ほぼ、全部屋が利用されているところである。今後の展開というところでは、議会からの質問もある中で、将来的にどうしていくかというところを検討していくというところである。

【会長】
いろいろと多面的に意見が出ているので、それぞれをまとめて回答いただきたいが、私の印象として、創造都市事業を進めるときに、金沢市や横浜市が日本で最初に取り組んできたときに、拠点施設というものはやはりイメージができていた。例えば、金沢市でいうと、２１世紀美術館が金沢の創造都市のシンボル的なものになって、そこで色んなことが起きている。横浜の場合だと、１９２９年にできた銀行がバブル崩壊後使われなくなったので、銀行をアートにしてバンクアートにして拠点施設にしたというのが出発点で、未だに「創造都市センター」として色ん

なことに使われている。神戸市の場合は、生糸検査場を国から払い下げてもらい、そこを「ＫＩＩＴＯ」というデザインセンターとして一つの拠点にしている。そういったことからいうと、先ほどの委員の発言趣旨としては、「高松の創造都市の拠点施設や拠点的な事業はなにか」ということだろうし、多面的に取り組んでいるのはいいが、そこのもうちょっとメリハリをつけるというところが、次の段階への課題として必要かもしれない。

それから、和歌山県に外国人観光客が多いというのは不思議だと思うが、実は、高野山と熊野古道が主な要因である。特に、高野山にフランス人が多い。なぜかというと、高野山で修行しているフランスの方が、ネットで配信されている。アジアで最初にインバウンドで出てきた人は爆買いだったので、大阪の難波や通天閣といったところだったが、欧米の人たちが持続的にずっと来るというのは、やはり、文化とかスピリチュアルの部分である。つまり、日本の文化の奥深いところを知ろうと思うこと、そこにかなり惹きつけられるようである。そこで京都や大阪と差別化ができるので、高野山や熊野古道に訪れる。そういう観点から見たときに、今、アートツーリズムで瀬戸内国際芸術祭がある年にはかなりインバウンドがあり、全国的に見ても活気を呈しているが、実は、今、国が準備している新しい文化観光振興というのが文化を奥深く知るための観光というふうに定義を変えてきている。ただ、文化を活用した観光というのではなくなっており、そのあたりを、ちょっと深みを持たせていけると良いのではないかと思う。屋島だけでなく、おそらく玉藻公園もあるしお城の話も出てくる。そういったことを総合的に組み立てていくのが肝要である。

それでは、一旦、この議論を中断し、事前に回答いただいた議題について御説明いただきたい。そこから関係したお話があれば、御意見をいただきたい。

【委員】

私が事前に回答した趣旨としては、ＳＤＧｓの取組が高松は今一つ見えてないのではないかということである。出席委員の中には、ＳＤＧｓのバッジをつけておられる方もいるが、私自身が食の関係で、日頃、動いている中で、「食の中でのＳＤＧｓは何ができるのか」というところから始まり、以前、東京で食関連の分野の方々がＳＤＧｓを考えるフォーラムのようなものに出席したときに、そこに飲食店の方、生産者の方、観光業を営む方のいろいろな方がいらっしゃったが、それぞれの方が自分の取組に対して、「自分の企業は１７項目のうち○と○を担っている」という明確な認識をしておられる方が非常に多かったということが私にとって衝撃だった。ＳＤＧｓの１７項目は、エネルギーだったり生産だったり消費だったりある中で、１７の項目のうち私たちは○○について取り組んでいるという方々が非常に多く、私も食の中で何ができるのだろうと思ったときに、考え方を変えたら何でもできるのだなと思った。本当に日常の中における個々の営みというのは、小さな行動であっても、何かしらＳＤＧｓの１７項目に落とし込めるということもそこ

で分かり、高松の個々の事業者の中にはすでに取り組んでいる方もおられると思うが、市民が参加する取組とかイベントについても、全部ＳＤＧｓに落とし込むことができると思う。関連するアイコンというのが、世界共通で決めているものがあるので、そういう表示を添えるなどするともっと市民に見える形で「高松市でやっている活動はＳＤＧｓの中の何についてとりくんでいるのですよ」というのが、見えるのではないか。そこが見えてくると、国際社会における役割を担っているという意識にもつながるし、高松が世界と関わりを持っているという認識にもつながるのではないかと思う。私自身が食の中でと思った中から始まったのだが、高松だって取り組んでいるということを発信したら、創造都市というところにつながるのではないかと思った。

【事務局】
「ＳＤＧｓ」については、事前に送付した資料１の 2 番目の回答にも記載のとおり、現在、本市で策定中の「第３期まちづくり戦略計画」や「次期たかまつ創生総合戦略」における施策や事業において、ＳＤＧｓの１７の目標のうち、どの目標に貢献しているのかをアイコン表示などにより、市民の皆様に分かりやすくお示しをする予定である。そのため、両計画の策定後、次回の 7 月頃開催予定の本審議会においても、両計画との整合性を図りながら、創造都市推進ビジョンの事業についてＳＤＧｓとの関連性についてお示しさせていただきたい。

【委員】
前進するということで、とてもいいことだと思う。

【会長】
これはとても大事なグローバルな問題で、後ほど説明したいと思うが、委員から提供いただいた資料として、「文部科学広報」でユネスコ創造都市ネットワークが取り上げられており、ここの大テーマが「ＳＤＧｓ」である。

【事務局】
その他、欠席委員からの質問については、事務局から説明させていただく。全部で２点あり、１点目が、「推進ビジョンに対して、取組事業概要、予算比、実績上昇率などが記載されていますが、ＫＰＩの詳細の記載がありません。目標値に対して、どういう結果が出たのかが、ざっくり拝見した限り、この資料からわかりませんでした。元々ＫＰＩの指標ないままこられた訳ではないと思います。その辺りを今後の資料ではお示しいただけると意見を述べる際助かります。全てのことを完璧にこなすのはマンパワーや予算面からも困難な場合もあります。"ＫＧＩ"といった観点も持たれていると思います。今回は欠席させて頂きますが、そういった点からも、会議での担当部署からの報告では発表してくださると出席者の皆さんもわかりやすいのではないかと思います。」という御質問である。２点目が、「高松アーティスト・イン・レジデン

ス」についてであり、「本市の地域資源を活用し、地域の中で滞在しながら、地域との協働及び交流を通じて、地域に賑わいをもたらす作品制作を展開するための「高松アーティスト・イン・レジデンス」とあり特にパフォーミングアーツが対象のようですが、"アーツ"というよりは"エンターテインメント"を指しておられるようにお見受けしました。アートの普及や若手の育成も目指す"アーティスト・イン・レジデンス"事業であれば、今一度方向性を確認していくことも必要なように感じました。国内外からの招聘をうたわれており、瀬戸内国際芸術祭や直島等の常設美術館、プロジェクトを通して世界に注目される地域なだけに、現状をＨＰで拝見する限りでは、少し残念に思われました。」という御質問である。

まず、１点目の御質問への回答については、第２次高松市創造都市推進ビジョンにおいては、１９ページに「各種の取組を推進していく上で、資料３１１ページのとおりの成果指標を設定し、進行管理を行いながら現況値よりも向上を目指します」と記載させていただいている。また、第１次ビジョンの計画期間から、各取組事業の実績数値については、資料２の「実施実績」としてこれまでもお示しさせていただいたとおりである。ビジョンの中で、明確に位置付けているわけではないが、資料２に記載の各取組事業の「実施実績」がＫＰＩに、資料３１１ページの成果指標がＫＧＩに近い位置付けになろうかと思う。今後においても、「実施実績」については、各取組事業の実績を示す参考値としてお示ししていき、成果指標については、現況値からの向上を目指すこととしていきたい。

【事務局】

２点目の御質問への回答については、事業を開始した平成２７年度から３０年度までの４年間で、国内外から計９９件の応募があり、そのうち１１件を採択して実施したところであり、このうち、パフォーマンスを主なジャンルとする企画が６件で、結果的に、半数ほどが、演劇分野での採択となっている。ただ、外部の委員を含む選考委員会による審議を経て採択された企画であり、本市の地域資源を活用して、地域の中に滞在しながら地域の方々との交流及び協働を通じてという条件が提案の中に入るので、結果として、パフォーミングアーツや演劇といったものが評価される傾向があるかもしれないが、特に募集に当たって、パフォーミングアーツのみを対象として募集しているわけではなく、広く文化芸術に関して募集をしている。実際に、３０年度は、これまで応募のなかった絵画等のジャンルでも応募があったところである。なお、本事業の課題として、ここ数年、店舗や市の施設で作品を発表するということが多くなっており、空き家や廃校といった地域資源の活用が低調化しているところがあるので、来年度以降の募集に関しては、募集要項等を定めるときに、どうしたら生かしていけるのかといった観点を含め再検討してまいりたい。

【会長】

ＫＰＩとかＫＧＩというのは最近、企業戦略で使われるわけだが、「自治体の中でも明確な目標を持ちましょう」という意味では、しばしば、議論されているので、前年度から増えているという言い方よりは、明確な目標値を掲げてどこまでいけるかといった形で議論していきたい。

【委員】
いろいろあるが一つだけに絞ると、会長の発言にあった「インバウンドの減少したこの時期は、足元をしっかりと考え、意識するいい時期ではないか」ということだが、まさしく、今来てくれる人が、どれだけ喜んで帰ってもらえるかと考えたときに、事務局からも言われたが、来られる方の目線にあって問いかけていくことが大事ではないか。そういう意味では、来られている方の良い意見はお聞きされているかと思うが、定量的に定性的に定点的に聞くような形をしないと、結果がどうだったかは分からないと思うので、そういう意味では、聞き方は色々とあると思うが、ＪＲで来られる方もいれば、飛行機で来られる方もいるし、目的も違うといった中で、ある程度、一つの方針を決めて、来られる方の目線でいろいろな意見を聴かせていただくことは大切である。意見を聴く際に、困ったこととか問題点だけを聞くのではなくて、良かったこと、他になかったことにも着目する。ともすれば改善だけを考えがちになるかと思うが、観光地というのは、そこにいる人が分からないところに意外と特徴を見出すということがあるので、我々が当たり前に思っていることが、意外と海外の人から見ると「こんな素晴らしい」ということがあるので、困ったこととか問題点だけを聞くのではなくて、良かったことを具体的に一つでも二つでも引っ張り出して、それをさらに今の時代に合った情報の発信の仕方にもっていくとか、いろいろな仕組みを考えていく必要がある。これは、本当に地道な事業というか作業だが、これをやっておかないと、その時その時の思い付きでやるようになるので、今やっていることもあると思うが、是非、こういうことも御検討されたらいいかと思う。

【委員】
昨年の７月１９日に、全国産業廃棄物協会の青年部が高松で全国大会をしたのだが、その時に全国から６５０名余りを誘致して、その時にプロジェクトとして何をするかといったときに、なかなか、高松でどっかに行こうというところが見つからなかった。結局、八十八か所の遍路道の清掃と、あとはうどん屋さんに行っていただいてということになり、瀬戸芸も開催していたが、そちらの方まで足を運ぶことはなかったというところが現状だった。ただ、全国から来ていただいた方々は、おいしい御飯を食べて帰ったと喜ばれたというところは聞いている。先ほどからお話を聞いていると、屋島の山上に何年か前からプロジェクトが上がっていると思うが、なにか木を見て森を見ずというところがあるような気がして、他の委員も言われていたが、せっかく、そこにお金を投入して拠点を作るのであれば、ヒルクライムやロードレースなどの大会があ

れば、高松から出発して塩江までも行けるので、庵治も行けるし屋島山上も行くことができる。そういった自転車でいうと、しまなみ海道の大三島はサイクリストの聖地ということで、たくさんの子どもから大人まで大会があって来られており、３月１５日には鳴門でロードバイクの大会も毎年されているので、そういった意味では、主にサイクルロードを作るぐらいは、現在、取り組まれているかと思うが、その行き方やルート等々を御検討いただいて、塩江、庵治、屋島等ここだったらコースとしてルートがいいのではないかというところを作っていただいて、広げていただいたら、皆さん自転車を持って前乗り後帰りで泊まっていって、おいしいもの食べて帰っていただけるのではないかと思う。是非、御検討いただけたらと思う。

【副会長】
　経営者という立場で意見を申しあげると、確かに高松市は美しいまちだと思うが、やはり美しさプラス経済力が必要だと思っているので、経済というのは正直に申しあげると、人手不足である。人手不足の話をここで出して良いのかというところもあるが、人口をこちらに来ていただきたい、高松に移住していただきたいというのは大きな課題としてあるし、外国人の働き手も欲しい。とにかく人手が欲しいというのが絶対である。外国人労働者が少しずつ増えていると思うが、単身赴任でいらしている方が多いような気がする。これを家族ぐるみで迎えるとしたら、小さい子どもが教育を受けられることが、とても大事だと私は思う。この子どもの教育を今の高松市の各小学校にそのまま入っていただくということは、本人たちにとって大変だと思うので、個人的な意見になるが、小学校を統合して空いた小学校があった場合、外国人同士がコミュニティを作れる教育の場というのを作って差しあげたらその方たちはちょっと安心できるのではないかということを感じることがよくある。もし、そのようなことができるのであれば、よろしくお願いしたいと思う。
　本日、Ｕ４０という集まりがあることを初めて知り、是非、御意見を聴いてみたいと思った。それと、世界の発信を高松からしていただくこれは、とても大事なことだと思う。四季折々が美しい屋島の自然を眺めて満足しているが、マルシェでそんなににぎわっていることを初めて知った。

【会長】
　先ほど少し御紹介した「文部科学広報」についてだが、ユネスコが世界で創造都市ネットワークを進めており、現時点で８０か国２４６都市が加盟している。日本では９都市が加盟しており、一番最近では北海道旭川市がデザイン分野で加盟した。このユネスコというのは、国連の組織で教育・科学・文化の専門機関なので、先ほども触れたが、国連の大テーマがＳＤＧｓであり、文化政策の面からもＳＤＧｓに訴求するということがユネスコ創造都市のテーマになっている。特に、１７の目標の中で、１１番目の目標が都市に焦点を当てた目標になっている。私は、

１１番目の目標というものを高松の創造都市計画の中にも意識的にも取り組んでいただきたい。これは、今、様々な大災害が起ころうとしており、地域経済としてもいろいろと不安定であり、場合によると、パンデミックになるかもしれない。こういう中で地域をより安全で、包摂的で、レジリエントな（しなやかな）ものにしていこう、そこで文化芸術が果たす役割を考えていこうということになっているので、このユネスコ創造都市の行き方も、是非、高松の創造都市政策の中に落とし込んでいただきたい。２年前にはユネスコ創造都市に申し込もうかというところまで来たが、今は少し保留になっているので、今年から言うとまた１年後の６月頃に申請の時期が来るので、それに向けてどうしていくかということもまた、議題になろうかと思う。

３　閉会